

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会 優秀賞

眼差しを向けて

柏市立柏第二中学校 第二学年 渡邊 奈々美

私は生まれつき右目に外斜視を患っていました。

斜視とは、本来であれば両目の視線が対象に向くのに対し、片方の目が別の方向を向いてしまう病気で、外斜視はその一種です。放っておくと視力の低下や立体感覚の欠如につながってしまうので、私は幼い頃から外斜視の治療のために眼科に通い、今でも再発しないよう定期検診を受けています。

私は、そんな外斜視の治療のため小学校一年生の時に手術を受けました。手術のため入院していた期間、医師や看護師さんたちによくしていただいたのを覚えています。入院していたのは一週間ほどでしたが、退院した後、私には疑問がありました。一体、誰が私のためにお金を払ったのか、と。

もちろん、両親がお金を払ってくれたのは間違いありませんが、入院や手術にかかるお金の全てを払っている様子はないと子どもながらに感じていました。

興味を持った私は、病気の時にかかる費用について調べました。結論から言うと、そのお金は税金によって賄われていたのです。私たちが病気や怪我によって病院に行ったとき、自分たちで払っているお金は極僅かなものです。では、残りのお金はどこから出ているのかというと、社会保障制度により税金から支出されています。社会保障制度は、国民全員が安心して暮らせるように、と作られたもので、年金制度や生活保護制度などもこの社会保障制度に含まれています。社会保障制度には健康保険という項目があり、健康保険には国民全員が加入することが義務付けられています。この健康保険により私たちは少ない金額で病院にかかることができるのです。

税金制度について習ったばかりで、理解が浅い私たちの年代の中には、「税金制度を無くすべきだ」、「税金は国民を苦しめている」と主張する人もいます。しかし、もし本当に税金制度が無くなってしまうえば困るのは税金によって守られている私たちです。確かに税金制度を無くせば貰えるお金は増えますが、それ以上に負担が大きくなります。身近な例を挙げれば病院の他に、道路の整備やごみ収集、教育も税金によって行われています。税金がなくなれば道路はひび割れても放置され、ごみは回収されなくなり、義務教育は有料になります。本当に、税金は無くすべきなのでしょうか。

私は真に無くすべきは税金そのものではなく、税金の無駄だと考えています。今よりも更により制度にするために、効率のよい税金の使い方を考え、実践していくのは将来大人になる私たちの役目でもあります。現状の税金制度をそのまま受け入れるのではなく、良くするために税金に対して興味を持つ。そうすることで、よりよい未来につながっていくのではないのでしょうか。私たち一人ひとりが税金に目を向けることが必要なのです。